

リサイクルを促すアート

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

日本では、分別の仕方などに多少の差はあるものの、ごみの扱いに関して、自治体ごとにそれほど大きな違いは見られません。しかし、米国は、州や都市によって状況が大きく異なります。可燃・不燃ごみ、ビン、缶、ペットボトルなど、あらゆる種類のごみをすべて同じ袋で捨てることのできる都市がある一方で、リサイクルを促すための先進的な取り組みを行っているところも見られます。

カリフォルニア州の主要都市であるサンフランシスコでは、2020年までに廃棄物をゼロ（Zero Waste）とする目標を掲げており、住民や事業者に対して、リサイクルのためのごみの分別を義務付けていますⁱ。ごみの回収やリサイクルは、従業員が100%出資する民間のRecology社が行っています。同社は、住民らから受け取る回収費用について、リサイクルや堆肥化ができないごみの分量に応じて課金するなど、ごみの減量と分別を動機付ける料金体系を設定していますⁱⁱ。

さらに、同社は、環境に対する意識啓発と芸術・教育支援を組み合わせた「Artist in Residence Program」という独自の取り組みを展開しています。同プログラムは、公募で選ばれた地元のアーティストに、同社のごみ運搬・リサイクル施設の一角にある、24時間利用可能な作業場を提供し、ごみを使った作品づくりを行ってもらうものです。参加アーティストたちは、施設内で材料となるごみを自由に集めることができ、Recology社からは毎月給付金が支払われます。滞在期間終了時には、作品の発表会を開く機会が与えられます。ここでの作品は、最終的に同プログラムの所蔵品として寄付され、施設の外にある展示場に保管・展示されます。

また、アーティストたちには、施設に見学者が訪れた際や、小学校の授業などにおいて、自身の経験や取り組みを話すことが求められ、メディアを通じた積極的な情報発信も期待されています。

処分場不足の問題は、米国だけでなく日本にとっても深刻なものです。規制や経済的なインセンティブだけではなく、ごみとアートの融合という新しいコンセプトを提示し、人々の感受性に訴え、環境に対する意識を高める同プログラムは、芸術・教育支援の側面もあわせ持ち、独自性のある取り組みとして注目されます。

ⁱ サンフランシスコ政府ホームページ：<http://www.sfenvironment.org/index.html>

ⁱⁱ Recology社ホームページ：<http://sunsetscavenger.com/index.php>